

堀内委員提出資料

卒業時の学生の能力

< 正常産を担う助産師の活用が求められる背景 >

- ・産科の閉鎖、産科医不足。
- ・極め細やかな助産師のケアと産婦の出産満足度(また産みたいと思える出産)。
- ・正常分娩において実力のある助産師の育成が急務。

< 卒業時の学生の能力 >

- ・教員による学生達成度評価
「妊娠経過の診断」、「分娩進行に伴う母児の異常発生予防と早期発見」、
「母乳育児支援」等は自立できていない。(全国助産師教育協議会2003)
- ・新人助産師による自己評価
「新生児ケア」「産褥期ケア」「育児指導」のできない比率が高い。(厚生労働省)

< 安全で快適な出産を支援する自立した助産師の育成には >

- ・妊娠期からの継続した関わりが必要であり、妊娠前から育児期までのトータルケアのできる、異常時の適切な対応のできる人材育成が重要である。

助産学科目の必修選択単位の比較

(全国助産師教育協議会2003)

科目名	指定規則	4年制大学	短大専攻科	専門学校
基礎助産学	6	2.3	7.2	8.9
助産診断・技術学	6	4.8	8.3	10
助産管理学	1	1.2	1.1	1.1
地域母子保健	1	0.5	1.2	1.4
助産学実習	8	6.5(8.3週)	9.2(12.3週)	11.0(16.5週)
他		0.7	2.9	1.9
合計	22	16	29.6	34.9

少子化に伴う助産学実習の課題

<看護：母性看護学実習の課題>

助産学実習の基盤となる看護教育における母性看護学実習が不十分である。特に、病院における出産数減少により実習病院での母子ケアを経験する機会が減少している。

<実習施設の確保の課題>

正常分娩10例の介助を行うために、実習場所の拡大、24時間体制の環境整備、学生の健康管理、実習指導者の補強、予算増大が課題になっている。(実際例参照)

<指導体制の課題>

複数の病院や診療所を新たに実習施設として確保する必要があり、それに伴い指導教員が必要となる。診療所では、出産数は多いが、指導できる助産師の確保が難しい。

助産学実習の実際例ー10例の正常分娩介助を終えるまでー

実習施設		病院(4週間)				病院(4週間)				助産所(4週間)			
実習内容		分娩期(5例)				分娩・産褥・新生児継続(3例)				妊娠・分娩・産褥・新生児継続(2例)			
週		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
学生A	月	オリエンテーション	分娩介助①	間接介助	休み	待機	5	分娩介助⑦	休み	<実習形態> ○助産所に宿泊実習 ○学生A・B→△△助産所 学生C・D・E→□□助産所 <実習内容> ○妊娠・分娩・産褥・新生児継続ケア2ケース ○助産所の日常業務:妊婦健診、分娩介助、母乳相談、家庭訪問など ○助産管理学 ○地域母子保健			
	火	分娩見学	休み	待機	分娩1期	待機	休み	産褥新生児継続 ¹	待機				
	水	分娩1期	分娩1期	分娩介助③	分娩1期	分娩介助⑥	間接介助	児継続 ²	分娩介助⑧				
	木	分娩見学	分娩介助②		待機	産褥新生児継続 ²	両親学級見学 ³		産褥新生児継続 ¹				
	金	休み	休み	休み	分娩介助⑤	助産所	助産所	助産所	児継続 ²				
	土	助産所	間接介助	助産所	5	助産所	就職試験 ⁵	助産所	助産所				
	日	間接介助	待機	分娩介助④	休み	4	待機	6	4				
学生B	分娩第1期より受け持ち開始。休息を取りながら2日にわたり受け持つ。しかし、分娩遅延し帝王切開に。介助例数に含まれず。												
学生C													
学生D													
学生E													

●1週間の実習の流れ(第3週目)

月	火	水～木		金	土	日
8:00 実習開始	8:00 待機	16:00 待機	6:30 分娩介助	休み	午前 助産所継続実習	8:00 分娩受け持ち開始
14:00-16:00 間接介助	助産師外来見学	20:00 分娩受け持ち	11:00 帰宅		午後 帰宅	16:00 分娩介助

●実習施設(病院)に必要な条件

- 分娩件数:学生5人×5-6例=25~30例/月→正常分娩件数300~360以上/年
- 指導体制:実習指導のできる助産師を有する施設

●実習に必要な教員の人数

1施設に必要な教員の人数

- 専任教員1人
- サポート教員1人
- 実習補助員2~3人

×実習施設数

- 学生15人、3施設で実習を行った場合
専任教員3人、サポート教員(母性看護学担当)3人、
実習補助員(TA:博士課程学生)6~9人